

昭和二十四年七月十三日第三種郵便物認可
昭和二十九年三月十五日發行(毎月一回・十五日發行)

(通第六〇号)

慈光

第六卷

第三號

目次

- 篤く三宝を敬へ……………花田正夫……………(1)
- 法蔵の四十八願……………福島政雄……………(6)
- 古稀の法悦の一境……………和才誠司……………(9)
- 『父・ちやん・お婦り』……………聚墨生……………(11)

篤く三宝を敬へ

花田正夫

華光

古聖は「佛法の大海には、信心をもつて能入となす」と申してをられます、広大無辺な佛法に入る門が信心ひとつにひらけるのであります。古聖はまた「信は道の元、功德の母」と云つてをられます、無明煩惱の黒雲に覆はれて、はてしなく迷ひ続ける身に久遠の大道がひらけ来り、無上甚深の功德の宝をたまはるのも、信心の開発によるおのづからなるめぐみであります。「篤く三宝を敬へ」と聖徳太子が憲法第二に仰せられるのも、この大切な信心をあらゆる人々の前に広く深く、お勧め下さつたのであります。

「篤く三宝を敬へ、三宝とは佛と法と僧となり。即ち四生のつひのよりどころ、よろづの国の極の宗なり。何の世何の人か、この法を貴ばざらん。人はなほはだ悪しきものすくなし、能く教ふるときはこれにしたがふ。それ三宝に帰せずんば、何を以てか枉れるを直うさん。」

私は本條を繰り返して拜誦して居りますうちに、自然に想到いたしますのが、太子を久遠の父母と慕はれ、且は救世觀世音菩薩の権化とあがめられた親鸞聖人の本典総序の

と顕微鏡との二つの働もをかねて下さるのが聖人でありま

す。

多々のごとくに阿摩のごとくに

と池山先生が、磯長の太子御廟に参詣された時、詠じられました、確かに祖師聖人が、愚鈍な私共に算となつて太子の淨心を注入して下さるのであります。法隆寺の前管長、佐伯老師が白井先生に「あなた方は、よい御祖師様をお持ちじやナ。太子の御前で、しみじみと御礼を申してゐる方々は念佛者に一番多い」と述べられて、聖人の御徳を讃仰して居られたと承りましたが、このことも私には強く胸打たれる逸話であります。

さて、篤く三宝を敬ふといふことを具体的に申し上げますれば、私共が、真実の道にとけて、道を生命とされてゐるよい先生に遭ひまつつて、真実の法を聞かせて貰ひ、法を聞くことによつて佛心に婦入させて頂くことであります。篤くとは深く純粹にといふ意味であります、それと申しますのも、浅く不純なものであります、或は人に執着し、或は法に固着し、或は自分自身にとどまつて、不徹底に終るのであります。

純粹な帰依について、勝鬘經には「如来に調伏せられて如来に帰依し、法の津沢を得て信樂の心を生ず」と説かれ

御文であります。

「穢をすて淨をねがひ、行に迷ひ信に惑ひ、心くらくさとりすくなく、悪重く障多きもの、特に如来の發遣を仰ぎ必ず最勝の直道に歸して、専らこの行に奉へ、唯この信を崇めよ」

篤く三宝を敬へ、との太子の憲法の御精神が、聖人の全身に迸り出て「特に仰ぎ、必ず歸し、専ら奉へ、唯崇めよ」と、繰り返し、まき返し、言葉を引きはめ、心をつくされて、仰せ出されて居ります。全く何とも彼とも申して見やうのない広大な御眞実心の進のであります。

この聖人の遺瀨ない悲心をとほして、太子の御精神を仰ぎまつるとき、無限の大悲をそこに感じるのであります。ここで一寸申し副へますが、他人様はいざ知らず、私自身は聖人の御慈育によつてのみ太子の眞心に参じ得るのであります。それは天体を観測するのに望遠鏡がいり、微生物を観察するのに顕微鏡がいりますやうに、和国の教主にまします太子の、広大にして幽玄な真心を仰ぐ上に、望遠鏡

とあります。親の念力にほだされて、子がやがて親をしたふやうに、如来の智慧と慈悲の善巧方便の力に、荒れすさぶ心が調へられ、我慢執の心を折られて、遂には如来の慈懐におさめとられるのであり、なほまた佛法の常に潤ふところに育てられて、自然に佛法が身に薫じ心に徹して、信樂の心を發起せられるのであります。斯様な純粹の帰依こそ、篤敬の眞意であります。

「四生のつひのよるべ、萬の國の極の宗」

四生とは生きとし生けるものであり、萬國とはあらゆる國と云ふ國であります。人と云へば小さく國と申せば大きくひびきますが、佛法の上では軽重はありません。個人の自覚が國の自覚と転ずるのであります。あらゆる國と人との究極のよるべ、そこにおいて始めて安ぎと和ぎを得るのであります。

勝鬘經に「世尊は依にして不求依なり」とあります。佛陀世尊は自らのむところを持つてゐられて、別に依るべを求められないのであります。

ところが同經に「衆生は無覆、無護、無依なり」と説かれ、また「衆生依無ければ彼々に恐怖す」とも説かれてあります。即ち我々衆生は、よるべなく覆ひなく、護りもなく、いたるところに恐れ怖れて、寸時も安ずることが出来ないであります。

佛はこの衆生の憐れむべき姿を知し召すが爲故に、無量の生命と無限の大悲をもつてわれ等を安慰して下さるのであります。

「如來は後際と等しく住す。如來は限着なければ、大悲も亦限着なく世間を安慰す。無限の大悲をもつて限りなく世間を安慰す云々。」

無尽の法、常住の法、一切世間の帰依となり給ふ云々。未度の世間と無依の世間において、後際と等しく、無尽の帰依となる云々。」

これも勝鬘經の御言葉であります。「如來は限りある時なく住して居られる。如來は一切衆生が残らず佛になる時までおかくれになることはない。然し無限に生れて來る衆生が残らず成佛するといふやうな時はないから、如來のいのちははかり知ることが出來ず、又如來の大悲も無限の時に於いて、あらゆる衆生を安慰せられる。この無限の大悲によつて限りなく世間は安慰せられる云々。また尽きることのないみのり、常住不滅のみのりこそ一切世間の帰依所となり、未ださとり得ぬものや、よるべない世間で、尽ることのない永劫のよるべとなる」といふところであります。私共の何時になりましたも、何処まで参りましたも、眞実のよるべもなく、常に恐れ怖れて、抜刀した賊におそはれて苦しんでゐる如き姿を、佛はよく知ろし召されて、

た。この無明の大夜に永劫の流転を定めとした私のいのちに、不滅の燈火を点じて下さるのが親鸞聖人であります。その燈炬に照されて七高僧に接し、更に聖徳太子と釈迦如來を仰ぎ得ました。斯くてやうやく「何の世、何の人か、この法を貴ばざらん」の仰せが、そのままに生きた事實として頂け始め、太子の踊躍される御慶びを感得するのであります。

祖師は「実」の字を「かならずもの実となるをいふ」と有難い解釈をせられて居ります。秋から冬にかかて何処に消えたか地にかくれた草木の実も、時節到來すれば必ず芽生えて來ます。生きたまことのもつ不滅の力の貴さであります。

「人はなほだ惡しきものすくなし、よく教ふるときはこれに従ふ」

絶対の眞実とは、眞実ならぬものを捨てずして、虚仮なる水を遂には功德の水にかして下すふ働があります。この一句は、佛願力の絶対無碍を確信される太子の力強く、たのもしく、有難い御言葉であります。「点滴岩をもうがつ」といふ俚言もありますが、これも、絶えぬまことのおつきぬ働きが、人心に徹する趣であります。

ここに人の善惡、賢愚でなく、「よく教ふる」ことの大切さを知らされます。さて「よく教へる」といふことに

尽未來際かけて、ゆるぎのない、たしかなるべとなつて下さる。そのために佛は不請の友として無量の生命と無限の大悲を成就して下さるのであります。

「何の世、何の人か、この法を貴ばざらん」

この一句をとほして私は、大法の不滅を確信せられる太子の、踊躍歡喜の御姿を拜するのであります。義疏に「經とは、法と訓じ、常と訓す。聖人の教は、復た時移り、俗を易ふと雖も、其の是非を改むる能はず、故に常と云ふ」とありますが、同じところであります。佛法の大海は、老少善惡のへだてなく、国境を越え民族をへだてず、時代が如何に移り變つても、塵もたまらず垢にも汚れず、何時も新しく永遠の現在として輝く、生きたまことの世界であります。

私は少年の頃から「古今に通じてあやまらず、中外にほどこしてもとらず」といふ言葉に非常に心をひかれましたが、これも「何の人、何の世かこの法を貴ばざらん」の太子の精神に淵源して居ります。又私の青年の頃にはパスカルの「我に不動の一点を興へよ」と祈つたことに感激いたしました。然し萬物は流転をその性として、内にも外にも眞実のよるべは見出されず、はてしない生死の大海に沈みきつて浮ぶ瀬のないことが知らされるばかりでありまし

いて、勝鬘經に「八地以上の大菩薩が衆生を折伏し攝取するには、ことさらに折伏の態度を現じ給はず、常に衆流に冥合して更に異趣なし」と説かれあります。「衆流に冥合して更に異趣なし」とは、子に対して親は、常に子と同じつ、子と共に成長するのであります。御慈悲が喜べないお淨土も恋しくないと悲歎する唯円坊に「親鸞もこの不審ありつるに唯円坊おなじこところにてありけり云々」の聖人は、よく教へられる人であります。如何に頑迷固陋な者も私共に同じられて、飽迄もお見捨てのないおまこと、お呆れのない大悲に浴しては、佛の眞実が五臟六腑にしみわたつて信順せしめられて了ふのであります。

小慈小悲もない私共虚仮の凡夫には、斯る大菩薩の境界は及びもつかぬことであります。私共は斯る廣大無辺の大慈大悲心に抱かれ、攝められて西方淨土の白道を辿らせ

て貰ふばかりであります。

「それ三寶によりまつらば、何を以てか枉れるを直うせん」

私は最後のこの一句によつて、歎異抄の二章と三章を仰ぐのであります。二章で「いづれの行も及び難き地獄一定の身に、よき人の仰せを被つて彌陀佛に歸命せられる」聖人、更に三章で「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死を離ることあるべからざるを憐みまたひて願をおこ

したまふ本意、悪人成佛のためなれば云々」と我身の罪悪感に徹し給うての懺悔讃仰の心は、おのづとこの結句に通じて居ります。

三宝の慈悲をたのみずしては、どうしておのが枉れる心を直うることが出来ようか、と仰せられる太子は、如何とも為し難い凡夫の身に立たれて、ひたすら三宝の慈悲をたのみ仰いで居られるのであります。虚仮なる御自身の全生命をあけて如來に全托して居られる姿を拜するのであります。

「世間虚仮、唯佛是真」とは太子の御家庭生活で常に仰せられた言葉に伝へられますが、枉れる心、くろく、きたなく、いぢけた心、その心の隈なく兎の毛、羊の毛のさきまでも、憐み悲しみ、ひかりとあたたかみを無限に注いで下さる佛陀のまことの讃歎の声であります。私共の罪業のありつたけが大悲におきめられ、温められ、融かされて行く。何たる幸慶であらうか、念佛無碍の白道もおのづとそこにひらけて行くのであります。

むすびのことば

大略憲法二條のころを申し上げましたが、根拠として勝鬘經を重に引きましたのは、慧慈法師を師とせられた二十二歳の太子は、勝鬘經を最初に深く読まれて、太子の信眼はこの經によつてひらかれてをると推定申すのであります。

法藏の四十八願

福島政雄

初めに四十八願をかいつままで一口で夫々の願のころを申しました。次に特に聖人が大切にお味ひ下さつた十九、二十、十八の三願とその転入の問題をお話しましたが、今日はこの三願以外で聖人が大切な願としてかぞへて居られます、十一、十二、十三、二十二、三十三、三十四、三十五の夫々の願について申し述べて見たいと思ひます。

必至減度の願

先づ十一願は必至減度の願と云はれて居ります。減度とは涅槃と同じ意味であります。涅槃とは佛様の理想の境界であります。願文を読みませう。

設び我佛を得んに、國中の人天、定聚に住し、必ず減度に至らずば、正覚を取らじ。

「定聚に住す」とは必ず佛の位にまで行くべき者の数の内に定まると解かれてゐる。今自分が佛陀の境界がひらけてゐるとは云へないけれども、必ずその佛のさとりに至る

す。そこで篤敬三宝の精神も、勝鬘經による開眼に直に通ずるので存分に引用いたしました。

更に「信心為本」を生涯の叫びとされました親鸞聖人の聖語や歎異抄を引用いたしましたのも、聖人が久遠の父母として慕はれる太子の御心をうけられて非僧非俗の道をひられ、信心一つを高唱せられましたのも、第二條の精神の人間化された方が聖人であると受取られるからであります。

靜かに本條を省みます時、大法の三世を貫ぬき、十方にあまねく、然もいかなる障りをもとかす無碍の力、その前に太子は御自ら貴びぬかづかれつつ、一切有縁の人々に「篤く三宝を敬へ」と、無限の慈悲の涙をもつてのらし続けて下さるのであります。和国の教主にまします太子のこの悲心に我が国と世界全体の永遠の黎明のひかりがさしそめるのであります。

二月十一日稿了

べき數に自分は入つてゐる、といふ落着いた境地であります。

この境地は何処から出るかといへば、佛のまことに触れる、或は佛のまことが、私のいのちにしみとほるといふところから、正定聚に住すとはつきりして来る。それがはつきりしますと、必ず自分は涅槃の境界まで導かれるといふ心持が決定する。今自分は涅槃の境地がひらけてゐるとはいへぬが、必ず涅槃の境地がひらけて來るといふ心境がはつきりして來た。何故か、佛のまことが自分の生命にしみとほると共に、一種の落着を体験する。今迄味へなかつた心の落着が何処かに味へる、この涅槃の境地といふ問題は今の私が説明の限りではありますまいがほのかにわかる、つまり佛のまことが身にとほつて、今迄味へなかつた一種の落着がわき出て來る。もえ出てくる。そこから自分の生命の全面を支配するところが涅槃の境地であらうと想像せられるのであります。

頭で理解出来るだけのことを申しますれば、涅槃の境地

は次のやうなことでありませう。私共に煩惱がある、苦しみ、悩みがあるのは現実の相であります、私共の生命をなしてゐるところの要素の全体が、本能感情までが、頭で考へるなどの種々の要素が円満に解決した状態でありませう。それが無くなつて了うたと言ふのではなく、腹立ち、欲、苦などの煩惱が、自分から無くなつて了うたのではなくして、それ等の要素が互に円満に調和したために、それらの要素が無くなつたかに感ぜられる、それが涅槃の境地だらうと云へるのであります。つまり閑けさの極み、それは独樂を廻してゐて眠つた状態、独樂が廻りつつ動いてゐないかに見える、これを譬として考へると涅槃はあんなことであらうと思ひますのであります。生命の要素の全活動であり、円満な調和であります。釈尊のおさとりがさうであります。悪魔が障けようとする、それに打ち勝つてさとする悪魔とは釈尊の生命の内容としての煩惱でありますから、それを打ち克つとは、煩惱を捨てるのではなく、釈尊の中心生命の廻りに全煩惱がまつらふ。非常にやはらかなつて服従してゐるので、煩惱が鬼の状態と見えぬのであります。

維摩經の中に、悪魔が維摩居士をかき乱さうとして、沢山の女を連れて来て、それを居士に差し上げようと云ひますと、居士は、それは結構なことと皆貰はう、と云ひ、皆

残らずひき受けて、それをよく訓練するのであります。我儘勝手な生活をして居たものを、一定の秩序のもとに働くやうにいたしました。悪魔はその様相を見て、女が惜しくなつて取りかへしに来るのであります。居士の様な方には女は不要でせうと申して乞ひうけるのであります、居士は自由に連れて帰れと申すのであります、女達はもう帰りたくないといふのであります。秩序立つた立派な生活をすればになりますと、悪魔の世界がいやになつてことわるやうになつたと維摩經に説いてあります。この女達といふのは、つまり我々の煩惱であります。

「正定聚に住し、必ず滅度に至る」とは、この煩惱の女達を迫ひ払ふのでなく、訓練して秩序ある活動のもとに、整然とした、よい、閑かな世界がひらけるのであります。悪魔の世界でさわぎ廻つたのが物音一つたてないで静かな状態で全活動するといふことであります。我々の煩惱の生活で、そこまで行つた時、必ず滅度といふ。必ずそこまで到らしめたい、現在は煩惱で苦しんでゐる人が、必ずそこに到らしめたい、さう云ふ願ひであります。しかもその第一歩はすでに味はされてゐるのであります。

歎異抄の十四章に「その故は彌陀の光明に照されまゐらする故に、一念發起するとき、金剛の信心を賜りぬれば、すでに定聚の位に攝めしめ給ひて命終すれば、諸々の煩惱

悪障を転じて無生忍をさとらしめたまふなり」とあります、が、この命終すればまでは上につけて読むのであると、近角先生からよく聞かされたところでありませう。一念發起の時が前念命終であり、これはこの世のいのちの終つたのではなく、煩惱が完全円満な調和の状態に入る、その芽生え出た第一歩といふところでありませう。それが命終の心持であります。さう云うところで、第十一願がすこしわかるやうになるのであります。

光明無量、壽命無量の願

次に十二、十三の願、光明無量、壽命無量の願について申し上げませう。

設ひ我、佛を得んに、光明能く限量有りて、下百千億那由他諸佛の国を照さざるに至らば正覚を取らじ。

由他劫に至らば正覚を取らじ。

ここに光明とは、智慧、壽命とは慈悲であります。光明の感じ、壽命の感じが、私共におきましてどうなりませうか。光明が無数の国を照す、無数の、限りのないことと説いてありますが、昨日もここを読み返しまして、どういふものであらうかと考へさせられました。さうしますと、私といふものは佛陀の光明のみなもとから、一番遠い処に居

るものである、私は佛陀の壽命から申せば一番短いところに立つてゐるのであります。その一番遠くに居る私にまで光明がとどく、それを表現するためにかう説かれてゐると思ふのであります。私の壽命は最も短い壽命である、一生を老いてのちにかへり見ますと、生れてから今日までの過去が長いと思ふと言へるかと思はれますと、つひこないだまで若かつたのに、自分の生命の過ぎ去ることの何ぞはやきしたが、つて自分の生命の短いことを感ずるのであります。斯様に壽命の短いのを感じて居ります私に、限りのない生命を與へたい、私の短い壽命をそのものに、久遠の壽命を内面的に感ぜしめずばやまぬ。私が光明に照されて壽命をかへりみると、自分の短い生命が、内面的な感じとして限られない長さを持つといふことを、佛陀のまことによつて私に感ぜしめられるのであります。さうすると、百千億那由他の語がすこしわかるのであります。

佛から最も遠い私に光明が及ぶとは、全世界いたるところに光明が照すといふことになります。また生命の短い、昨日まで若かつたといふ感じである私に、久遠の生命を、佛のまことによつてさづけられるといふことが、一切衆生が、久遠の生命を與へられる、そこに佛の生命が一切衆生に及ぶのであります。

一般に光明は空間、生命は時間をあらはしますが、空間

や時間の無限では私がつちのけになつて、茫漠たる世界に無限になつて行くといふ風になります。これを昨日味ひましたやうに考へますと、光明と生命の無量が、身にひたひたと、身についたものとして味ふことが出来ます。

光明無量とは、今のやうな一念発起の時は内面的に鮮かに感じます。私が二十六歳の夏に心がひらけ始めたのが、さう云ふ時、この世界に心がひらかれた時、光明無量であります。広大無辺な母親のふところにあたたく包み入れられてゐると、鮮かに感ずるのであります。

生命無量の感じは、そのあとに続くのであります。佛の

古稀の法悦の一境

和才誠司

謹みて早春の御慶びを申し上げると共に、いよゝゝ大悲の宏大にして年と共に更に新なるを感ずる次第であります。平生ほそゝと御慈悲を欲び、ときたま懺悔の気持ちも起り、時には御慈悲がわかつたやうに思ふが、日々の生活に煩惱が飛び出し歎びを打ち壊してしまふ。現実否煩惱は

御慈悲と申しますか、何処々々までもお見捨てないお慈悲は、これを感じる以前に、それを感じると言葉にいへぬ前に、光明が照してゐる。無自覚の自覚がひらけて、成る程お慈悲であると感ずる。智慧の光に照されてゐるのは無自覚の自覚であるが、その結果として自分の生命にしみじみとした慈悲を感じる。

智慧と慈悲は二つであつて一つであります。光明がとほつて来て、生命の自覚がそれに続くのであります。

未完

私の試金石であり、善知識である。私はこの善知識に毎日御縁を結ばせて貰つてゐる。

元來相對の私に、絶対の佛様がわかる筈がないのに、絶対の佛様がわかつたやうな錯覚を起すから、實際問題で佛様が消え信仰が崩れる、平生業成とは実に手厳しい御戒め

である。

此の意味に於いて私のさ、やかな毎日の営みは、世間から見れば一顧の価値もない存在であるが私自身には実に無限の価値を感ずる。なぜなれば私は煩惱を通じ実生活の上にて大悲を体験させて貰つてゐるからである。私は毎日の営み、毎日敢へて行つてゐる罪惡に無限の大悲を頂いて生かされてゐる。私が己の罪惡が知らされたと自覚しても、それは単に私の罪惡の一部にしか過ぎない、一部を全体と思つてはならぬ。私の自性は私自身にわかるやうなまやましい自性ではない。どこ／＼までも、どうにもなれぬ底の知れぬ浅間しき奴である。御恩が少し僥はれると直に佛様がわかつたやうな気持になる奴である。年を重ねるに従ひ愚痴は募り欲は深くなるばかり、少しもよいことはない。今まで「あたりまへだ」と思つた事が実は「あたりまへ」でなく、私の得手勝手である事が次々と体験される。

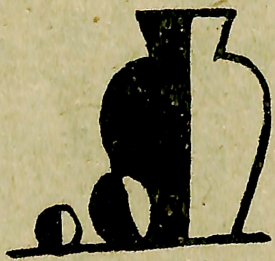
然るに私には此浅間しき生活を離れて信仰がないからでもあらうか、この浅間しき生活に年と共に益々憧憬を感じ尊さを感じる。特に老境に入ればなるほど残り少き人生の尊さを痛感する愚鈍な私は唯日常生活に引きずられ単に蠕動してゐるに過ぎぬ。私は折々御法座に御勝縁を結ばせて頂いてゐるが真面目な求道心は微塵もない。年老いて仕事は制限され、友人は片づ端から斃れ、己の心身は老衰し萬

策竭きて茲に佛様におまかせする以外解決の道なき絶対絶命の境地に逐ひ込まれてゐる。逃げんとして既に逃げる余地がない。

年を重ねる毎に愚痴が募り欲が強くなることは真に困つたことであるが、此現実を如何ともなし得ないこの困り果てた実情を能く御承知になり、貪欲飽くなき私をどこ／＼までも御救済下さる佛様の御実家を仰ぐばかりである。御慈悲が私の命の綱であり生活の総である。

私の欠点、私の罪惡の総てを知り竭し、然もどこ／＼までも見捨て給はぬ無限の大悲に抱かれ、今年も亦何等の不安なく古稀の身に年と共に更に新なる法味を覚え、希望に生くる新なる年を迎へ得た事は何たる仕合せであらうか。

年毎に又新なる御慈悲かな 昭和二十九年一月誌す



父ちゃんお帰り

聚墨生記

本年一月十五日、広島刑務所で「父ちゃんお帰り」といふ題の坊やの銅像の除幕式が行はれ、録音ニュースで全国にも放送せられたが、同日の毎日新聞の広島版によると次のやうに誌されてゐた。

目下広島刑務所は再犯者ばかりが收容せられてゐるが、満期して出所しても、誰も迎へてくれないといふ淋しさといひがみから再び暗い道に走つて行く者が尠くないので、田中所長はそこを同情し、その淋しい心の隙間を、すこしでも満たす道はなからうかと、あれこれと苦心探求した挙句、家には妻子が、お父ちゃんのお帰りをひたすら待つてゐるといふ意趣を「父ちゃんお帰り」の坊やの像で象徴することになつた。铸造は岡山大学の美術科講師、宮本隆氏が担当、台石には鈴ヶ峰女子短大の講師で歌人、山隈衛氏の短歌

きようはちちかへり来るべし庭松にのほると一つキャ
ラメルしやぶり

が刻まれてをり、裏には「父ちゃんお帰り」の題名が刻

まれてゐる。時代は種々移るけれど、如何なる時代が來ても、変ることのない無邪気な坊やの銅像が、今回教誨堂の前に建てられて、幾久しく收容者に、大きな希望と和らぎのひかりを放つであらう。

これが記事の大要であるが、そこに、あどけない容姿で、父を喜び迎へる坊やの銅像の写真が掲げられてゐた。私はこの記事と写真を見つめながら、田中所長の言語にもあらはし尽くせない喜びと満足、憶念し、思はず眼頭があつくなるのを覚えた。

田中さんと私は岡山の高等学校の同窓生で、池山教授に独乙語を学び、或は歎異抄の講話なども共に聴いた信友であつたが、卒業後三十年目に、田中さんが名古屋市中部成人保護委員長として赴任して來られたのを機会に、度々御目にかかつて旧交を大いに温めました。其後広島へ田中さんは転任せられたが、私は痼疾の身、おとづれるよすがもなく、独り淋しさをかこて居つたところへ、今度の報告を聞き、ことに感慨無量であります。

田中さんが「父ちゃんお帰り」の坊やの像を想ひつかれたことからふと、大無量寿經の序文に還相の大菩薩の衆生を導く相を「純孝の子の父母を敬愛するが如し」とあるのを想到して、田中さんはこの經文から立案されたのではなからうかとさへ思つた。大人の世界にこそ善い悪いといふきびしい差別とへだてがあるが純な子供心には、かけがへのない父であり親であります。お帰りとよろこび迎へる童心には、塵ばかりも雑夾物がありません、そこに大菩薩の徳光におのづと触れるのであります。そこに親が子に導かれ、親の自覚に帰らしめられる、負うた子に教へられるのであります。

さもあらばあれ、地上に一人でも、自分を想ひ、心にかへ、念じ續けて下さる人が居るといふことが、人生の旅に

あ　る　男　の　話

私が○拘置所に勤務してゐた時の事である。或、世にも怖しい罪を犯した男が、独房に入れられてゐた。巡回の時に、時々声をかけると、その男は人なつかしうに応答をして、そんなに怖しい男とは思はれない。私は段々その男

おいてどんなに力となり慰めとなり励ましとなるかは申すも愚かであります。親が無くなると故郷が無くなると申すのもさういふ消息でありませう。田中さんが業報のままに独生独死、独去独來の人生に、久遠の御親のましますことを「父ちゃんお帰り」の坊やの像に象徴して居られることを知る人は知るであらう。ただ懸樋を通じて谷水が常に流れて庭を潤ほす如く、この像を通じて心の渴きが無限に潤ほふやうにと念じてやみませぬ。

更に田中さんが昭和二十七年十一月、に書かれた広島婦正管区発行の「むつみ誌」の巻頭言「ある男の話」を想ひ合せ、今度の銅像の建立こそ、田中さんの遠く深い宿願であつたと知らされ感銘の愈々深いものがありますので、次にその全文を載けます。

と親しくなつて、しまひには、自分でその独房の中へ入りこんで、膝つき合せて話すやうにまでなつた。その独房の壁に、一枚の子供の描いた自由画が貼つてあつた。小学校三四年位の子供の絵で、倉のやうな家の前に、柿の木があ

つて、大きな実がたわわになつて居り、又その下にコスモスの花が咲き乱れた、稚いながらほほえましいクレヨン画であつた。

「君の子供の絵かい」とたづねると、

「いゝえ、わたしに子供なんぞありません。これは私がお世話になつた家の子供が、送つて来て呉れたのです」と答へて、その絵を懐かしさうに眺めながら、次の様な話をした。

「怖ろしい罪を犯した私は、警察の眼をのがれて、山や野をさまよひ歩き、鳥取県の片田舎の、ある村を通りかかりました。その村に一軒の石屋さんがあつて、親方が外に出て、トンカン／＼と鑿を振つてゐました。日は暮れかかる、腹は空るで、私はもう歩く力もなく、ほんやり佇んで、その石屋さんの仕事を見てゐました。すると石屋さんが私の姿に気がついて、

「お前さん、何処へ行きなさる」とやさしく声をかけて呉れました。私は「ある事情で家を飛び出したが行くあてもなし、思案に暮れてゐます」と話しますと、「そりや可愛相だなあ、何ならわしの家に居て、石工の手伝いでもしてみるか」と言つて呉れました。思ひがけない言葉に、私は飛びあがる思ひで、そこのお世話になることになりました。石屋さん夫婦と小学生の娘一人の三人暮りでした。こ

ボロと大粒の涙を流し、遂には泣きジャクツてしばらくは言葉も出なかつたが……親方の着物まで送つて下さいました。この絵もその家の娘が描いて送つてくれたのです。

所長さん。わたしがねエ、あんな怖ろしい大罪を犯す前に、この石屋の親方に出合つてゐたら、そしてあんなに温い家庭の空気に触れて、人の世の情けを知ることが出来てゐたら、私はこんな身の上にならないで済んだのだと思つて、それが残念でなりません……。

私はさう思つた。彼の瞳は穏やかに澄み、その声は人なつかしく響いて、生れつきの悪人とは決して思はれない。彼はその後、罪の償ひをしなければならなかつた。地上で彼に会ふべくもない、私は今、痛ましく彼の面影を心に描くのみである。そして思ふ、世の中には彼の様に生れながらに境遇に恵まれず、人の温情も知らず、世の荒浪にもまられて、悪の道に走つて了ふ人が、どんなに多いことであらうかと。然しそれ等の人にも呼びかけたい。よし現在がいかに冷く悲しくとも、飽く迄も絶望せず、短氣を起さず、人の世の光りを信じて歩んで呉れよ！と。

うつせみのちひさきいのちのいやはてにおほきいのちにいるぞうれしき

田中克己詠

の何処の馬とも解らない風來坊の私を家に入れて、無茶と言えは無茶ですが、この極悪の私をちつとも疑ふ様子のない家の人を見ると、流石の私も悪いことは出来ませんや。それに私にも多少石工の経験もあつたので、親方の下で一生懸命に働きました。親方には可愛がられる、おかみさんには優しくされる、子供にはなつかれる、ほんとうに楽しい日が続きました。私の一生涯に、あんな仕合せな時期があらうとは想像もしませんでした。

私は母親の連れ子で、義理の父親に冷遇され、母親からも邪魔者扱ひにされて、人の世の情といふものを知らずに過して來ました。さうした私の過去でありますから、私はこの時初めて、世の中にこんなにも温い、人の心があるものかと、親方一家の親切に泣いたのでした。

然し私の様なものにこの仕合せは長くは続きませんでした。そのうちに国勢調査があつて、役場の人が家々を廻るやうになり、私は遂に居たたまらなくなつて、親方に無断で其の家を飛び出し、挙句のはて、とう／＼此処に來るやうになりました。

私は此処に來てからも親方のことが気にかかり、特別発信を願つて、親方にわび状を出しました。親方はさぞびつくりしたことせうが、それでもこの私を見捨てもせず、親切な慰めの手紙を下さつて……斯ふ言ひながら彼はボロ

法 信 抄

横須賀 福島 先生

鶯鳴き 春乾坤にかへれども 逝きにし

わが娘 永遠にかへらす

去年の春 葉山の海を愛でしわが娘 今は

世に亡し かなし わがむね

昭和二十六年春日詠

三重県 木村 知巳

遺 詠 一月末示寂

護られて 新春の香りがぎにけり

この身の幸や いとも尊し

護念さる 此身命の尊さに 闘病の心

燃しつづけん

昭和廿九年。初頭。

新潟県 佐藤強三郎

死に様は 如何あらんとも 凡夫われ

ただみ誓に まかせてぞいく 昭和甲午 正月十八日

良書紹介 念佛者の人生観 西元宗助著

定価百円、送料十六円、發行所、京都市下京区花屋町西洞院、永田文昌堂。振替京都九三六番

佛教は進解で現代青年に親しみ難いといはれますが、その支意を生活の中に味到して、平明に述べられてあります。生活の底にある佛教。信仰の根本問題。人生と信仰の三篇になつて居り、特に青年学徒の方々におすすめ致します。著者は京大哲学科卒業、建国大学教授、ソ連抑留生活、西京大学勤務。京都市下鴨藁倉町六八が住居です。

編集後記

再び春がめぐつて來ました。長い冬に堪えて草木が萌える姿はたまらない美しさであります。生命あるもの不思議さであります。外見何の变化も見えない生活ながら、信の旅は日々新にして、また日々新なるものがあります。底のない佛法の有難さであります。

さて宿痾の私は何一つ出來ないのであります。誌友の方々が、夫々のところで燈火を掲げて下されて居る、そのことが自然に知れて來まして、有難く尊いことと草庵にあつて合掌して居ります。

岡山の愛生園の盲人の患者のAさんが、念佛に帰られると、早速点字を練習し始められ、盲人の世界に信のひらけるよすがを作つて下さり、又奈良市の竹田様は脳溢血の発作から半身御不自由になられて、始めて後生の一大事に驚かれ、歎異抄を通じて広大な佛心に帰られると何か御恩がへしをしないと念願せられまして、点字を習得せられ、信仰書を点訳せられて、盲者の光明となつて居られます。

又兵庫の国立療養所で田口さんはソ連引揚げ後肺疾で療養中に歎異抄から念佛に気づかれ、信友と共に燈炬を月々出版せられて、療友の間に念佛ひろまれと一すぢに念じて居ら

れ、大府の療養所でも山元、柴田、服部柴涅、目下の諸氏が、純信の動きを續けて居られ療養の燈火となつて下さつて居ります。

盛岡市では清水凡禿居士の信をつがれて長岡高入氏が御病弱の身を持たれながらも、法縁を續けて居られます。

人生の春の野を飾る千草八千草、いよいよ繁り、益々栄えかしと念じて居ります。

△「法蔵の四十八願」は十一、十二、十三の大切な願について道味を頒つて下さいました。先生の御信味をとほしますと經典の一字一句が生きたまこととして輝き、つやつやと心にひびいて來るので、固牢頑迷などもすれば枯渴する私をひらいて頂いて居ります。御住所は三月一杯に東京方面に御移転なさらねばならぬとの由でありましたが、未だ確定いたしません。

△「古稀の法悦の境」は、士官学校の時代から近角先生の御法縁をうけられ、終戦時は某要塞司令官をして居られました和才翁に頂きました。枯淡な御心境に、念佛の香りが薫じて居ります。故安波氏の信仰体験録に無二の師友として記されて居る方でありませぬ。福岡市大坪町二ノ四八が御住所です。

△「父ちゃんお帰り」は広島刑務所長の田中克己氏の御腐心に感激し、皆様の膝下にお送り申し上げます。死刑囚の物語は胸をうたれます。広島市古島町刑務所官舎が住所です。△「篤敬三宝」私自、身太子の御精神を仰いで居ります栗の一端であります。未熟なものであります。皆様の御提擲を仰ぐ次第であります。聚墨生記

昭和二十九年三月十日印刷
昭和二十九年三月十五日発行

毎月一回十五日発行

一部 十七円(郵税共)
定価 半年 百円(郵税共)
一年分 二百円(郵税共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八

編集兼
発行人

花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人

奥川 正生

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所

千種印刷所

名古屋市南区駄上町二ノ二八

一道会館
発行所

慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番